平成10年改訂による生活科の「理念を深めた」学習指導についての一考察

福　應　謙　一

(愛知教育大学大学院　教育学研究科)

Kenichi FUKUOU

(Graduate Student, Aichi University of Education)

Ⅰ　研究目的

平成10年12月14日、小学校学習指導要領の改訂が行われた。平成元年度新設の生活科にとって、初めての改訂である。

今改訂の「まえがき」[1]には、「完全学校週5日制の下、各学校が『ゆとり』の中で『特色ある教育』を展開し、児童に豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの〔生きる力〕の育成を図ること」と述べられている。いわゆるゆとり教育の中で特色ある教育が求められているのである。

また、生活科の「改訂の要点」[2]において「内容の改善」を次の3点で示した。

① 内容の厳選

② 地域や児童の実態に応じた指導の推進

③ 多様な人々と触れ合う活動の充実

今改訂に伴う教育課程の基準は平成14年度からの実施であるが、必要に応じて移行措置対応がとられることとなった。

折りしも、本研究で取り上げる岡崎市においては、平成15年度開催の全国小学校生活科・総合的学習教育研究協議会に向けて、小学校4校において授業公開・研究発表が予定されていた。岡崎市現職教育委員会生活科部会、三河教育研究会生活科部会においては、本改訂の趣旨を踏まえた単元が構想され、指導の内容や展開について検討を加え、生活科指導の充実が図られていた。

こうした研究内容や指導の重点化は、岡崎市教科指導員制度における「生活科指導員」の学校訪問において、徹底が図られるところとなった。そこで、本研究においては、当時、生活科指導の先進的動きを示していたと考えられる岡崎市において、どのように指導内容の充実が図られるところとなっていたか、指導員訪問時の学習指導案を基に洗い直しを図ることにした。平成10年改訂による指導内容の変容及び充実、指導上の特色や実践上の課題などを、生活科発足当初との比較や、今日における生活科実践との関連において明らかにしたい。それにより、改めて今日に伝えたい生活科実践における理念の深まりを明らかにする。

Ⅱ 研究方法

1　対象

岡崎市教育研究所所蔵の生活科学習指導案を基にして、単元構想や指導計画、学習指導の展開内容を分析し、指導内容や指導傾向を把握する。その際に平成4年度版、平成21・22年度版学習指導案との比較も行う。

- 平成14年度生活科学習指導案17校29実践
- 平成4年度生活科学習指導案12校28実践
- 平成21・22年度生活科学習指導案

2　分析の視点

平成10年「改訂の重点」を踏まえ、次の視点に従い分析した。

A　重点的な扱いにより、内容に広がりと深まりが見られるようになったか。

生活科発足から10年の歳月を経て、安定的な指導がなされる中で、子どもたちにゆとりをもった学習指導を行うように期待される。設定単元の削減により、一つ一つの単元の大型化、重点化が図られる。一つの単元に、内容・項目を多く入れ込み時間をかけて内容の充実・発展を期した焦点化が図られるようになってきているかどうかを明らかにする。

B　人々と触れ合い、繰り返しかかわる活動が設定されているか。

人と人との人間関係の希薄化、隣人との接点やコミュニケーションの欠如が問題となってきている

中、子どもたちの生活もその範疇にある現実を踏まえて生活科に期待される学習内容である。人々との触れ合い、繰り返しの出会い、地域の人々との接触など、多様な学習の場の設定、多様な活動コースの選定などにより、様々な人々、いろいろな事象とのかかわりによる内容の充実が図られているかどうかを押さえる。

C　地域重視で子どもたちの生活に根ざす単元構成がなされているか。

生活科の定着化が図られ、教科書の内容そのものから一歩出て、その学校の地域的な内容、特色ある指導内容の単元設定が進んできている。その一つの単元だけにとどまるのでなく、前後の単元との継続性・発展性をも考えて内容の充実が図られるものでありたい。子どもの実態や、子どもの生活に根ざす地域重視の掘り下げた展開となっているかどうか明らかにする。

D　探検における表現方法としての地図の扱いは適切になされているか。

子どもたちの学習経過・学習内容や学習成果を表現する方法は多様化の傾向にある。それぞれの子どもが最も適切な方法で、より多くの機会に表現するように設定したい。

その際に、空間的な位置付け、地域的な広がりを表現する方法として地図を用いることは有効である。充実した学習活動・学習内容を的確に表現する一つの方法として、地図の扱いはどのように展開されているかを取り上げる。

Ⅲ　研究内容

上記A～Dの分析の視点に基づいて、以下「秋」実践、「生き物」実践、「探検」実践の三つの内容を対象として、実践状況を考察する。

1「秋」実践・・・主として分析の視点A、B

秋実践については、1年生の子どもたちが入学当初の春から夏への、季節に関する学習の進め方について、会得してきていることを踏まえることができる。秋の木々の彩りや生き物の移り変わりが明確で対象も押さえやすい。当地域で採用しているD社の教科書においても、「みんななかよし」（春）以降、「なつ、あき、ふゆ」それぞれとの「なかよし」として位置づけて記載されている。ただ、秋とは言っても、9月から11月の間の変化は大きい。ここで取り上げる6実践については、いずれも10月下旬から11月末にかけて木々の葉の色付きを見計らって行われたものである。

①　季節の変化と秋実践の位置付け

○平成14年11月14日　1年「秋をみつけたよ　ーどんぐりこままわしバトルたいかいをしよう一」（22時間完了）A小

本実践は10月の初め「雨が降った後などでどんぐりがたくさん拾えたよ」に始まる。どんぐりなどの木の実に関する関心は高く、教師の「どんぐりは19種類ある」という紹介により一挙に関心が広がっている。これまでの子どもの「どんぐりこま」を作った体験が「どんぐりこままわしたいかい」を呼び込んだ。教師は、活動を通して「多くの気づきを期待し、手立てを考えた」のである。どんぐりノート作り、どんぐりバトル免許書、バトル練習カード等である。秋実践をどんぐり中心にしてアクセサリー作り・洋服作り等の物作りへと広げた。特化することで、多くのことに気付きを期待できるが、方法はやや強引のように思われる。子どもたちが事象と事象を関連付けながら、そこから分かる知的な気付きを大切にしたい。

また、本実践においては「他教科との合科的・関連的な指導」[3]がなされている。秋探検を終えた後の「秋をみつけていろいろなものを作ろう」として、生活6時間、図工11時間、国語1時間を用意して組まれた。生活科と図工科がセットになって単元を構成された。こうしたことは、子どもたちが入学後半年を経て「活動範囲の広がりとともに、友だちとのかかわりも広がってきた」実態の基に成り立っていると思われる。自然の変化に気付かせたい教師の思いとともに、「自らの経験する中で気づいたり、調べたりしたことを友達とかかわり合い、教え合うことによっての学習」を願う教師によってなされるものと考える。

②　具体的な活動や体験を取り入れた秋実践

○平成14年11月28日　1年「秋となかよし」（16時間完了）B小

2学期（9月）初めに「ぼくらの仲間、B小の生き物たち」を経て本単元に入いる。生き物の変化に合わせて、「B小の森の自然にも興味」をもつ子ど

もたちをとらえ、学習対象との出会いを設定している。校内の樹木としてコナラ・スダジイ・アラカシ、さらにイチョウ・カエデ・サクラもあり、「収集活動や創作活動に発展させていける魅力的な教材」とする。とりわけ、いわゆるドングリについては「一緒にドングリごまを作って遊んだり、作り方を教え合ったりするなど、人とのかかわりも大いに期待できることから、創作活動や遊びの時間を大切にしていきたい」として教材をとらえる。子どもの活動を前面に考える教師は「自然物を使った遊びでは子どもの発想が実現できるように、材料や道具、資料などの環境を整えておく」としている。活動の主体は子どもであるという考えに徹し、活動できる状況を作って見守る教師の姿が浮かぶ。

学校で始まる秋探しは、登下校の通学路や近所の公園、神社にも及ぶ。とりわけドングリについての関心は高く、下校後に父母とともにドングリを集める。校区外れの南公園には多種類のドングリがあり、大きいドングリの存在が情報として伝わる。多くの関心がドングリ遊びに集中することで、ドングリごまを始めとして、ドングリ笛・ドングリ転がし・やじろべえ・マラカス作り等々、一つの素材を基に遊びの工夫が広がる。その結果は「1・2なかよし秋ステージ」となって2年生の子たちや保育園児に楽しんでもらったり、「家の人に知らせよう」(国語)と発展したりすることとなった。子どもたちの遊びへのこだわりは、体験を通した喜びがあったからこそ深まったものと考える。

③ 祖父母を始めとした身近な人々とのかかわり

○平成14年11月28日　1年「あきとあそぼう」
(18時間完了) C小

地域に学習素材を見出す時、そこで生活する人々とのかかわりを学習の場面に位置付けたい。「あき」への関心が学級全体へ広がってきたという手応えを感じた教師は、それをきっかけにして「学校のまわりへの探検に出かけることにした。春の探検を体験している子どもたちは、春・秋の相違に気づいたり、新たな発見をしたりして、途中での秋の収穫物を持ち返った。そして、子どもたちの実態「三世代同居の家庭も多く、『おばあちゃんが、ジュズ玉でお手玉を作ってくれたよ。』『おじいちゃんが、よく回るどんぐりごまを作ってくれたよ。』等、祖父母から教わった自然との関わりを得意そうに話している」ことを踏まえた。探検を通して広がった秋体験への活動意欲と地域の人材の活用を合わせて、教室近くにある「会議室」を有効に活用する「あきランドづくり」となった。

子どもたちの実態について「身近に自然に触れる環境があり、自然に関わる体験をしているとはいえ、全ての子供ができているわけではない」という把握の基で、学習を通したかかわりの中で、「『みんなであそびたい』という子供の思い」を醸成した。「探検を通して持ち帰った木の実や草花で飾るものを作るとか、ゲームなどの遊び工夫する子供」の出現により学級の雰囲気が高まりを見せるのである。

本実践は、祖父母との遊び体験を基盤としているが、その内容にとどまらないで、秋の収穫物を活用して多くの遊びを工夫している。けんだま・オナモミダーツ・まつぼっくりリース・落ち葉フクロウ等、多岐に及ぶ。そこには遊び方の説明や遊びルールの必要性も生じる。友達同士の協力がなくてはできないことである。学習の終末は、「しょうたいしていっしょにあそぼう」、「たのしかったことを、えやぶんにかこう」(共に国語扱い)となった。自分たちで楽しかった「あきランド」を広く知ってもらい、一緒に楽しむことで楽しさを共有するものである。

④ 五感を活用した秋の味わい

○平成14年11月7日　1年「Dのあきをたのしもうーあきとなかよしー」
(22時間完了) D小

生活科の実践を進めるにおいては、私たちの持つ諸感覚(五感)に磨きがかかる。秋という季節を学習する場合も、夏から秋へ、秋から冬へと変化を、五感を通して感じ取る。

D小実践において、「五感を使って体全体で秋を感じることで、季節の変化や身近な自然に気づかせたい」、また「秋を使った遊びを考え、実際に作って楽しむことで、自然の面白さに気づいてくれるように願う」のである。秋に対する感覚は、それを意識するかどうかにかかわる。子どもたちが日ごろの生活において、「どんぐりを拾ったよ」「朝が寒くなったね」等の情報を持ちこむことを受けて、夏から秋への変化を感じ取る。子どもの諸感覚が少しずつ自然界の変化、移りゆく季節に向いていく中で、次

第に多くの情報が寄せられて、その学級における「秋」が形成される。教師は、見つけてきた秋を「あきはっけんカード」に書かせ、「体のどこを使って秋をみつけたか記入」を付け加えさせておく。多くの秋見つけを共有することで、「秋に対する友達の様々な思いに気づくことができるであろう」と考える。これらの子どもたちの活動や体験を通して得られる事柄は、教師のねらう「いろいろな秋の感じ方があるということに気づかせたい」という願いとなる。具体的な事実に基づく気付きは、いわゆる「知的な気付きを大切にする指導」[4]につながるものと考えられる。

○平成14年11月28日　1年「あきとなかよし」
(25.5時間完了) E小

また、E小実践においては、「夏に遊びに行った公園に再度秋にも訪れることによって、季節の違いを体全体で感じ取ってほしい。感じ取る感覚としては手触り・におい・形・色・音がある」、それに加えて「見つけたものに対する、すてきだと思う自分の主観や、遊んだりする働きかけも、体全体で感じ取る感覚ととらえたい」としている。

本実践においては、子どもたちのとらえる「いろいろな感覚を使った9つの項目」は、「さわったよ、遊び、におい、形、色、やってみたよ、音、思ったこと、宝物」として、主観的なもの、行動面も含めて、諸感覚を働かせたものとして扱っている。異質のものの集約と思われるが、感覚とそれに伴う活動を含めて多面的にとらえようとする姿勢は伺える。

⑤ 伝統文化の継承と発展

生活科発足当時に、秋祭りが展開の中心となって大々的に実践されたものに比較すると、派手さは消えて多少の縮小傾向を感じる秋実践ではあるが、秋の自然を満喫しながらの地道な取り組みは評価したい。次に示す「あきとあそぼう」実践においては「秋のお店屋さんをしよう」(6時間設定) を単元の終末に位置付けて学習の総まとめをする構成にし、子どもたちが意欲的に活躍できる場を設定している。

○平成14年10月31日　1年「あきとあそぼう」
(16時間完了) F小

F小学区は、都市化が進み、通過交通が多いため危険を伴うこともあって、子どもたちの自然体験が少なくなっているという実態がある。ただ、区画整理事業がなされ、所々に公園が配置されており、自然に関わる活動や体験の場は残されている。学校から比較的近い真宮遺跡周辺も史跡公園として木の実、木の葉集めには最適の「秋を体験できる」場である。教師は、「学校の周りの公園等には、ギンナン、ドングリ、ナンキンハゼとそれらの葉等がある。自然と親しみ、自然の変化に気付き、さらに2年生の子から昨年の話を聞いたり、お店屋を開くことによりみんなと遊んだり協力して活動したりすることが楽しいことにも気づいてほしい」と願いをかけた。そのために、次のことを手立てとした。

・五感を使っての体験活動の工夫
　自然の変化を探すゲーム、木の葉や木の実の感触やにおい、木の実の調理
・表現する場の確保
　気付いたことを書くカードの設置、掲示の場や発表の場、作った物の展示
・友達とかかわる場の設定
　2年生から経験を教えてもらう、宝物作りの紹介や協力

子どもの実態を踏まえ、きめ細かな構想により、子どもたちは「秋体験」にどっぷりと浸かる。教師はさらに単元の途中に、校内にあるミカンの収穫や試食を取り入れたり、おかざきっ子展（小中学生の図工・美術展）の木の実工作コーナーを紹介したりして、子どもたちの創作への工夫や活動への意欲を高めるのである。

本実践は、秋祭りという大きなイベントとは異なるが、子どもたちが諸感覚でつかんだ秋を「秋の贈り物」という形で表現をして、それをさらに「秋のお店屋さん」として紹介し合う流れとした。そして、「秋の思い出カードを作ろう」という結末を迎える。地図・写真に作り方を入れて、「秋の楽しい思い出をいっぱいつめて」友達に送るのである。

2「生き物」実践・・・主として分析の視点B，C

平成10年改訂による生活科指導内容では、生き物の扱いは、やや後退傾向にあると思われる。従来に見られたウサギの飼育はすっかり影を潜めて、集約した学習指導案の中にも少ない。一部の学校において飼育されていると思われるが、学習の対象では

なく中・上学年の飼育委員会の世話の対象になっているのであろうか。T社の生活科教科書では、生き物の扱いは、上巻「あきとなかよし」と下巻「生きもの大すき」に位置付けられている。秋探しの中で秋の虫を飼う実践であったり、野原の探検の中で捕獲した水生生物や身近な生き物を飼う内容であったりしている。それぞれ、野外での活動の延長上にある飼育である。

ここでは、2年生に見られた生き物の4実践をもとにして構想や展開の実際について分析し、実践の様子を述べてみたい。

① 日常生活・地域生活と生き物

春から夏にかけて気温が高まるにつれて多くの生き物が生息して、日常的に目にするようになる。2年生の子どもたちは、進級の喜びとともに自信と自覚を持った行動は自ずと活発化する。生活科の学習においては、校内から校外学習へとシフトされていく。学校の周辺には、子どもたちの関心を引く事物・事象が多く見られる。学級において学校の周りのことが共通の話題となって地域への探検活動となる。

○平成14年6月20日　2年「ぼくらのかえる、大きくなあれ！」
(23時間完了) G小

学区探検の折に、市街化が進み、少なくなった田畑の一角で「かえるやその卵をみつけ、おたまじゃくしを育てる活動をする」という実践である。生き物好きな学級の実態もあって、生き物に触れてみたい、飼ってみたいという気持ちが強く、自ずと育てる方向に進んだ。教師は、「子どもたちが生き物を採集し、自分で飼って見る経験を持つことは、生き物も自分たちと同じように生きており、成長していることを発見して、驚き、親しみを持ち、いろいろな生き物を一層大切にしようとする心を育てる上で意義あること」と考えた。

学習の始まりは、探検活動でカエルに出合うことによる。カエルを飼ってみたいという思いから発展して「かえるのたまごを育てよう」となる。卵からオタマジャクシになり、カエルへと成長を遂げていく中で、世話を続ける。その時々に応じた世話の仕方を工夫して、カエルに成長した時、その対処の仕方を話し合うのである。飼い続けることは難しいと感じながらも、何とかより快適に過ごせる「かえるのお家作り」を試みる。そして、最終的には学校の池に入れる考えと、田んぼに戻す考えが出される。このような過程を通して「自ら進んでいろいろな生き物に目を向け、命の大切さに気づき、進んで生き物の飼育活動を行っていこうとする子どもたちになってほしい」と願う。子ども一人一人が「自分の飼いたい数だけ飼い続けた」結果が、そのように長い間継続的に世話をし続けることにつながっている。それだけ大切に思う気持ちが強かったのであろう。

② 生き物と生活環境

2年生における探検活動は子どもたちが自分の住む地域へ出かけることとなる。居住する環境によって異なるが、町探検であったり、野原探検であったりする。校外への探検活動に慣れてきた子どもたちの関心は多方面に及ぶであろう。そんな中で、秋探検ではちょっと草むらに目をやるとその季節の虫たちに出合うことができる。町探検の学習の一角に加えられる内容である。

○平成14年9月　2年「われら　生きものたんていだん―秋の虫となかよくなろう」
(14時間完了) H小

子どもたちが生き物に触れる機会が減ってきている現状を踏まえて、何とか学区の生き物と接することを増やしたいと考えた実践である。1学期は「生きものさがし」でカエルやオタマジャクシに出会った。そして、この2学期（9月）からは「秋の虫を飼育し、観察の機会を持ちたい」と構想する。そこには教師の「幼少時代に、虫の音を聞き分ける術を身に付けたら、秋の夜長がより楽しいものになる」という熱い思いがある。そして、単元を通して「子供たちが身近な環境に住む生き物に愛着を持って接し、様々な生き物についての気付きを高めていってくれる」ことを願っている。

4月から始まる「われら生きものたんていだん」は30時間完了の構想である。そのうちの14時間が「秋の虫となかよくなろう」実践である。教師の虫の音への熱い思い入れは、必ずや子どもたちの心に響くものと思われる。「音を出す虫調べ」を経て「虫の音さがし」に出かけている。実際の虫の奏でる音とCD音の虫の音との聞き分けをクイズにして意

欲付けを図っている。学級には、「虫ハウス」と称した虫にとって快適な生活空間作りをしたり、「虫しんぶん」を発行したりして虫に関する活動を広げた。学習展開の進め方は、教師主導の感が強く出ているが、耳で聞き分ける力を身に付けさせたいと願う。秋の虫に関心を持ち始めた子どもたちは体験を積み重ね、より一層関心を持ち続けていくことであろう。それが心豊かに生きる端緒になれば幸いである。

③ 生き物とのかかわり

子どもたちの生き物体験は、希薄になる傾向にある。生活が便利になるにつれ、生き物と人間とが分離されて、生き物にとっては生き難い世の中になってきていると思われる。子どもたちが生き物に接する機会は減少し、日常生活上の便利さのみが優先されることとなる。そのような現実からして、子どもたちと生き物との接点を持つ学習機会は貴重である。とりわけ、温もりのある生き物とのかかわりを持ち合わせる必要性を感じる。

○平成14年5月30日　2年「生きものをかおう」
(23時間完了) I小

「構想」において、次のようにとらえている。

子どもたちにとって、生き物は興味・関心を引き付ける対象である。探検活動において、樹木や草むらに見られる生き物を喜んで捕まえるが、飽きてしまうと、干からびても平気で放っておく姿を見られる。捕まえることに興味があって、「飼う」「育てる」という意識は希薄である。

そこで、教師は「適切に生き物とかかわり、飼育体験を持つことは、生き物への親しみを増し、愛着を深め、命の大切さに気づく上で、大きな意義があると思われる」と押さえる。

本「生き物」実践は、「水辺の生き物を育てよう」と「モルモットを飼おう」の二段構えになっている。学校近くの長池での「生きものたんけん」等で捕まえたオタマジャクシ、カニ、アメンボ、カメ、メダカ等によって「ミニ水族館」が作られる。その経験を生かして、「1年を通じてたっぷりと生き物とかかわらせたい」という願いを持って「哺乳動物」を用意する。

12匹のモルモットとの出会いが始まる。かわいいという思いの内の4日目に一匹の死に出会う。モルモットの死は、子どもたちに少なからずショックを与えることとなった。それまでの活動を見直し、生き物にとってのより快適な生活は考えるようになるのである。

生き物を飼い続けることは容易なことではない。教師が子どもとともに知恵を出し合って「元気で健康に生活してほしい」という共通の願いを抱きながら飼い続けることとなる。

④ 命あるものへの愛着

核家族化の進む中では、子どもたちが日常生活において「命」にかかわる場面に遭遇する経験はまれである。ましてや、生や死に直面することは珍しい。そんな中で、学校生活において、飼育活動を通して日常的に生き物の世話を続けることで、生死にかかわることを始め、いろいろな場面に出会うことが考えられる。生き物体験は今の子どもたちにとって必要性の高い内容である。

○平成14年6月27日　2年「ヤギさん大すき」
(40時間完了) J小

アイガモとモルモットの飼育活動を経験した子どもたちは、2年生になって今度はヤギの飼育を引き継ぐものとして意気込む。教師は、そのような子どもたちへ「ヤギは胎生の生き物であり、人に近い要素を持っている。飼育活動を通して、アイガモやモルモットとは違う特徴に驚き、様々な発見をしていく中で、ヤギに対する好奇心が沸いていくものと考える」というようにゆっくり構えて指導に当たる。さらに、「赤ちゃん誕生のときには、母ヤギが子どもの世話をする様子から、親子の絆を感じることができ、さらに生命尊重の思いを深めていくものと考える」としている。3年生から譲り受けたヤギを飼い続けて子ヤギの誕生をみるという、1年間にわたる遠大な単元構想である。

この子どもたちは、1年生において生き物の死を体験しており、「もう死んでほしくない」という意識を持ち、「死なないように上手に育てたい」と慎重である。ヤギについてより詳しく知りたいという思いを受けて小単元「ヤギ博士になろう」を設定した。子どもたちはグループごとにヤギの体の特徴やしぐさ等、多くの気付きとともに疑問を深めた。毎

日交代で餌やりや小屋掃除等のヤギの世話をしながら、特性をつかむのであった。

こうした比較的大型の生き物を飼い続けることは容易ではない。餌やりや掃除には休日がない。子どもだけでなく、学校全体や家庭の協力、さらに行政の力を必要とすることもある。動物飼育を可能にする周囲の条件整備を図りながら、進められた実践である。

3「探検」実践・・・主として分析の視点C，D

探検活動は、1年生においては「学校探検」というように学校内で行われ、2年生においては学校の外に出向く探検が行われることが多い。探検は、「探検・発見・自慢」と並び称されるように、子どもたちの活動意欲をかき立てる言葉である。生活科発足当初は「探険」いう字があてられることもあったが、今日においては「探検」のみととらえている。
子どもたちが出会う対象を「調べる」意味合いが強いことによると思われる。

探検活動においては、何を調べるという対象を明確に持つよりも、出会った対象から多くの要素を引き出すことが大切である。探検の対象から新たな発見、新たな気付きを持つことに意味がある。校内や校外において諸事象に出会ってとらえる新たな事実こそが子どもたちにとって発見であり、気付きであって、皆に紹介したり、より詳しく追究する対象として扱ったりするものである。

① 身近な探検

子どもたちにとって一番身近な対象は校内における探検である。小学校入学間もない子どもたちが、これまでに見たこともない諸事象を次々に見つけ出していく。見つけた一つ一つは単発であっても、今後の生活の中で次第に分かってきて、相互の関連も明らかになることが多い。

○平成14年6月6日　1年「がっこうたんけんをしよう」　(13時間完了)　K小
○平成14年6月20日　1年「ぼく・わたしのお気に入りのしょくぶつ」　(20時間完了)　L小
○平成14年6月21日　1年「ぼくらのM小学校」　(19時間完了)　M小

探検活動は、校内ならば繰り返し自由に行うことが可能である。K小では「はっけん　こんなひとこんなところ」として、働く人と場所を関連的にとらえた。さらに広げて、特別教室ごとの機能や役割をとらえるようにした。また、L小においては、「葉っぱ探しをしよう」と課題設定をして葉の形状や色合い等によって区分けして、「遊ぼう、食べよう、育てよう」等の用途分けをしている。目的を持って葉っぱ探しに走るのである。

最も一般的な探検はM小の進め方であろう。「学校を歩いてみよう」と学校全体を概観してから、「学校探検に行こう」と設定して、「行ってみたいところから自由に探検しよう」とする試みである。興味・関心の違いに応じて探検箇所が異なる。

こうした学校探検は、学校に慣れるできるだけ早い時期が望ましい。それぞれの子どもの分からなさから関心の高まりが見られ、教え合う光景も目にする。学校生活に慣れるにしたがって、対象や内容を絞った学校探検が行われるようになっていく。学校探検は、子どもたちの生活圏の広がりとしてとらえることができる。

② 地域とのかかわりと生活

町探検は子どもたちが住んでいる地域への愛着が基盤となる。2年生の子どもたちにとって、交遊の広がり等から少しずつ地域の様子が見えてくる時期の学習である。学校と居住する地域周辺から徐々に他の所に目を向ける。子ども同士の情報交換も行われて、面白そうなところがあることに気が向いてくる。その気持ちの高まり、関心の広がりの中で進めたい実践である。

○平成14年6月14日　2年「まち　大すき」　(24時間完了)　N小
○平成14年10月　2年「秋のわくわく町たんけん」　(25時間完了)　O小

探検活動も時期により内容が異なる。春から夏にかけては、学校から少しずつ校外へ出る学習となる。O小「まち大すき」の子どもたちの日常も、「学校から学区の遊び場へと少しずつ行動範囲の広がりを見せ、自分の学区への親しみを深めつつある」という状況にある。活動の範囲は広がりつつあるものの、「子供たちには未知のものがたくさんある」の実態把握の基、「川や畑などの自然が存在し、駅やスーパー、公園等の様々な施設も存在する」をつかませたいので、探検は回を重ねる。みんなで下校ルート

にしたがった探検をして、次は「行ってみたいところに、もう一度探検に行こう」となってグループ行動をとる。

一方、O小「秋のわくわく町たんけん」では、春の探検を経ているので、関心にしたがって初めからグループ行動である。もちろん、保護者の付き添いがあって成り立つことだ。子どもたちは、いろいろな施設や商店の存在は知っていても、「自分の生活とのかかわりには気付いていない」という。繰り返し探検をすることで人々と触れ合いながら、次第に地域を身近に感じるようになるのである。

③ 人・事・物とのかかわり

「町」の様子を調べ出した子どもたちにとって、自分たちの住む地域にはみんなに紹介したい人物・事象・事物がいっぱいあると考える。自然や文化、またそれにかかわる人たちなど内容は多岐に広がる。まさしくお宝が満載で伝えたくなる。多くの関心の対象を整理しながら、見学・観察する探検コースを設定するようになる。

○平成14年6月27日　2年「Pの町は宝箱～教えてあげる、ぼくらの宝」
(13時間完了)　P小

○平成14年　2年「Qの町はおたからいっぱい」
(21時間完了)　Q小

ここで取り上げる2校は、ともに商店街及び住宅地を多く有し、一部に自然景観も見られる、まさしく「町探検」にふさわしい地域である。

P小では、「Pの町の自然や施設、人々に親しみ、地域への関わり合いを大事にする気持ちが深まってほしい」と願う。この時期、子どもたちは「仲の良い友達同士でグループを作り、お互いに行き来したり、新たな遊び場を探したりと活発に行動し始める頃」ととらえ、活動意欲を「宝探し探検」として活動できるように仕向けている。このように子どもの動き出す兆しをつかんで探検を用意することが望ましい。「1年をかけて、学区全体を探検させたい。何回も足を運ぶことにより、その時々の季節の変化も実感できる」としている。探検のその都度、「たからものを絵地図」にまとめて蓄積をしておいて、「2学期からの探検のきっかけ」としている。絵地図作りの積み重ねが、次の単元に生かされることは間違いたい。

一方、Q小では中心市街地に近く、公共施設の整っている地の利や残された自然を取り込んで、「様々なジャンルの建物や自然が豊富にあり、子どもたちの探検意欲をかき立て、多くの発見を生むに違いない」と期待をする。学区には多くの要素が集積しており、子どもたちに一つでも多くの町の宝に出会ってほしいと願う教師の思いは熱い。本単元においても、地図が活用されている。単元を始めるに当たり、「家の周りに何があるだろう」と語りかけて、「自分の家の周りのイメージマップを作ろう」という課題で始まる。それぞれの子どもの持ち寄った絵地図では、「まだよくわからない、○○に行ってみたい、もっとくわしく知りたいな」といった意識から探検が始まるのである。

④ 探検と地図学習

繰り返し町探検に出かけると、子どもたちの頭に地図感覚が芽生える。これまでに出かけた所、出かけるに際して通ったコースが分かる。それぞれの場所を点として意識していたものが、少しずつ面的な広がりを持てるようになってくる。教師は、その子どもの成長を見計らって場所と場所を道路で結びつける地図を用意していく。

○平成14年11月7日　2年「すてきだよ　ぼくらのまち」　(27時間完了)　R小

1学期探検において、下校時の色別コースで通りの様子の探検からスタートしている。そこで、興味のあるものが共通しているグループを作って、まち探検に出かけるのである。

2学期においては、「何度も探検の対象とかかわりを持ちながら、さらに深く追究していくことが主な活動となる」として、気になるもののある場所へ何度も出かけるとしている。「まちの人とのかかわりが深まり、地域の人々との交流を通してまちへの愛着を深めることができる」と考えている。

繰り返しの探検を通して「気づきを広げ、深めるための手だて」として「探検で訪ねた場所を大きな絵地図にまとめ、自分で調べたところ以外にもすばらしいものがあることやすてきな人がいることを確認できるようにして、自分たちの地域への誇りを持つことができるようにする」を挙げている。地図に関して、「地図に貼る写真もしっかりとれたよ」「地図に色をきれいに塗ってわかりやすくしよう」

と構想して、地図にまとめ、地図を通して「すてきなまち」を表現するものである。地図の活用方法から見て、教師の用意した地図であろうが、地図に表現したことが媒体となって、自分たちの住むすてきなまちが広がっていく。子どもたちの探検活動の広がりと深まりが、絵地図として次第に詳しく表現されて、自分たちの住むまちへの一層の愛着となり、「自分たちのまちに対する誇りを強く意識する」ものと考える。

⑤ ふるさとへの愛着

生活科は「ふるさと教科」と考えることも可能である。学校や学校の周りの居住地域の自然や社会、人々とのかかわりなどを教材として、そこで多くの活動や体験をして地元の良さや素晴らしさ、有り難さを学ぶ。子どもはそれを基にして成長していく。幼小の時期に生活し、学ぶ場であるからこそ、その後の過ごし方や考え方の土台となる。

○平成14年10月3日　2年「お宝発見！Sっ子探検隊～教えてあげるSの宝～」
(35時間完了) S小

三町からなる学区は、東西に約2kmに広がり細長いため、お互いに行き来して遊ぶことが少ない。そのため、他の町の様子について知らないという実態を重く見た教師は「自分の住んでいるところを中心に、気に入っている場所や、すごいと思う人等を紹介する」ことを取り入れた。それを基にして、三段階に分けて学習を進めた。第一段階は1回目探検を行い、それを『まちの宝地図』にして、第二段階は2回目の探検へと進める。第三段階は、『お宝ニュース』として発表し合うのである。

探検計画を立てて、まず観光ブドウ園で有名な地区の探検に出かけた。ぶどう狩りのシーズンは過ぎているが、子どもたちの関心はブドウ園だけでなく、沿道の植物や川に棲む生き物にも及ぶ。次に学校周辺の探検から新興住宅地の探検へと進む。子どもたちがとらえたそれぞれの事象が宝であり、宝を床に置いた地図上に位置付けるために「地図の上を歩いて、探検を思い出す」活動を取り入れている。新たな気づきを大切に宝として扱うことによって、「お宝地図→お宝ニュース→まちの宝」と、子どもたちの中へ意識化されていく。子どもたちが体験する一つ一つの「様々な場所やもの、人との出会い」の積み重ねが「町への愛着を深める」こととなって、定着するものと考える。

学校における探検活動は、学習を終えた後、子どもたちの日常的な交流となって互いの町を行ったり来たりするものと思われる。それぞれの場所のおもしろいところでの活動が、上学年になって、さらに他教科・領域での学習につながることで、子どもの心に「ふるさと」意識が芽生えていくものと考える。

Ⅳ　研究のまとめ

生活科発足から10年が経過し、生活科が教科として定着してきている一方、生活科が「活動や体験」という言葉の基に形式化していると思われるような面も見られた。そんな中で、学習指導要領の改訂が行われ、生活科においても指導内容や学習展開の仕方の見直しが図られた。

ここで取り上げた平成14年度に実践された学習指導案を基に、先行研究で発表した[5]平成4年度の実践とは異なる成果と課題を整理してまとめとする。

・取り上げた学習指導案は、1単元当たり完了時間が、少ないもので13時間、多いものでは35時間ないし40時間完了にもなっている。平均20時間前後完了予定になっている。これだけ息の長い実践においては、単元における問題意識を明確に持ち続けて、追究意欲の持続の工夫を図ることが必要である。発足当初の学習対象を絞った実践から見ると、1単元にいくつかの要素を組み合わせたり、追究対象を掘り下げたりして学習を展開している。子どもたちの学習意欲の持続に留意して単元を組んだ授業実践が多く見られた。

・生活科発足当初は、活動や体験が重視された結果、子どもの実態や、子どもの生活の様子など、子どもに即した内容に必ずしもなっていなかったが、学習指導要領改訂後となる14年度の実践においては、単元構想において、多くの学習指導案でまず始めに、子どもの生活ぶりが明記されていた。子どもの興味・関心、子どもの活動意欲を促すような教材の選定がなされるようになってきた。合わせて子どもの生活する地域の実態なども考慮されている。生活科の学習において、まず子どもの生活ありき、という

ことが明確になっている。

・生活科における地域事象を取り入れるに際して、そこに生活する人々とのかかわりについても意識的に取り入れる工夫がなされるようになってきた。探検に出かける折に人々と出会ったり、地域で業務を営む場に出かけたりして直接話を聴いたり、活動する様子を見たりしている。学習活動における地域講師として学校に招いたり、地域の現場で指導を受けたりすることが増えた。人とのかかわりの広がりが、学校内における教職員や子ども同士のかかわりから、校外での人々との折衝まで広くかかわり合う場を求めた実践が増えて来ていると思われる。

・地図の取り扱いについては、子どもの発達から見て１年生における地図の扱いはあまり見られないが２年生になると活用されることが多くなった。１学期から始まる地域での探検活動の学習に多用されている。探検して気付いたこと、分かったことを記録する場として地図を用いている。多くは、教師の用意した地図に子どもたちの学習記録を書き込んだり、貼り付けたりして、学んだ事象の明確化を図るものである。春での探検に、秋になってからの探検活動を重ねることによって、季節の変化や人々の生活の営みの様子の移り変わりをとらえるものである。

なお、今回の学習指導案においては、「知的な気付き」への対応と考えられる、「気付きを広げ、深める手だて」と明記して、気付きに重きを置く工夫が多く見られた。気付きについて明確に押さえられていたが、この点については具体的に分析することができなかった。生活科における重要なキーワードであるので、今後の課題としたい。

【引用・参考文献】

1）文部省『小学校学習指導要領解説生活編』平成11年

2）前掲書 1）P.6−7

3）前掲書 1）P.5

4）前掲書 1）P.4

5）福應謙一・野田敦敬「生活科の発足時における授業実践についての一考察」愛知教育大学研究報告第60輯（教育科学編） 2011年

《 活用した主な 指導案一覧 》

○平成14年11月14日 1年「秋をみつけたよーどんぐりこままわしバトルたいかいをしようー」(22時間完了) A小

○ 平成14年11月28日 1年「秋となかよし」(16時間完了) B小

○平成14年11月28日 1年「あきとあそぼう」(18時間完了) C小

○平成14年11月7日 1年「Dのあきをたのしもう―あきとなかよしー」(22時間完了) D小

○平成14年11月28日 1年「あきとなかよし」(25.5時間完了) E小

○平成14年10月31日 1年「あきとあそぼう」(16時間完了) F小

○平成14年6月20日 2年「ぼくらのかえる、大きくなあれ！」(23時間完了) G小

○平成14年9月 2年「われら生きものたんていだん―秋の虫となかよくなろう」(14時間完了) H小

○平成14年5月30日 2年「生きものをかおう」(23時間完了) I小

○平成14年6月27日 2年「ヤギさん大すき」(40時間完了) J小

○平成14年6月6日 1年「がっこうたんけんをしよう」(13時間完了) K小

○平成14年6月20日 1年「ぼく・わたしのお気に入りのしょくぶつ」(20時間完了) L小

○平成14年6月21日 1年「ぼくらのM小学校」(19時間完了) M小

○平成14年6月14日 2年「まち 大すき」(24時間完了) N小

○平成14年10月 2年「秋のわくわく町たんけん」(25時間完了) O小

○平成14年6月27日 2年「Pの町は宝箱〜教えてあげる、ぼくらの宝」(13時間完了) P小

○平成14年 2年「Qの町はおたからいっぱい」(21時間完了) Q小

○平成14年11月7日 2年「すてきだよ ぼくらのまち」(27時間完了) R小

○平成14年10月3日 2年「お宝発見！Sっ子探検隊―教えてあげるSの宝〜」(35時間完了) S小